

カルコン・シンポジウム 2025 年報告

日時：2025 年 2 月 17 日～18 日

場所：ワシントン D.C.（於：スミソニアン国立アジア美術館）

●概要

日米文化教育交流会議（通称、カルコン）では 2 年に一度、日米両国の委員が参集し「合同会議」を、「合同会議」が開催されない年には「シンポジウム」を、日本とアメリカが交代に主催している。2025 年 2 月には、アメリカ、ワシントン D.C.において、米側カルコン主催、スミソニアン国立アジア美術館（NMAA）共催で、同美術館のメイヤーオーディトリウムを会場にカルコン・シンポジウムが開催された。シンポジウムのテーマは「日米パートナーシップの形成ークリエイティブ産業、情報へのアクセス、サブナショナル外交」。日本から都倉俊一文化庁長官と松岡宏泰東宝代表取締役社長を招いた基調講演、その後両氏をパネリスト、カルコン米側副委員長のウィリアム・ツツイ氏をモデレーターに「クリエイティブ産業を通じた相互理解の促進」についてパネルディスカッションを行った。その後、現カルコンの 2 つの分科会で議論されている「情報へのアクセス」及び、「サブナショナル外交」についてのセッションが行われ、カルコンの議論について社会へ広く情報発信を行った。シンポジウムには外部から各界のリーダーや学生も参加した。

東宝のご厚意により会場の入口にゴジラ像が配置され、参加者を出迎えた。基調講演でも大きく取り上げられた「ゴジラ」については、会場からの質問も後を絶たず、その後メディアにも取り上げられた。松岡氏の講演では、「ゴジラは大使になり得るか」という問題が提議されたが、今回のシンポジウムを通じて、日本のクリエイティブ産業を代表するゴジラは「十分に大使の役割を果たせる」ことが証明されたと言える。

●日程

2 月 17 日（月）

米側主催夕食会（於：イタリアレストラン「Carmine's」）

2 月 18 日（火）

- － カルコン・シンポジウム（於：スミソニアン国立アジア美術館 メイヤーオーディトリウム）
- － ランチ・プログラム（於：スミソニアン国立アジア美術館）
- － 国立アジア美術館視察（於：スミソニアン国立アジア美術館）
- － 国立公文書館視察（於：国立公文書館）
- － 在米日本大使館主催レセプション（於：在米国日本大使公邸）

●内容

米側主催夕食会

イタリアンレストランにて、カルコン委員・事務局・両政府関係者及びシンポジウム関係者を対象に、ネットワーキングを兼ねた夕食会が行われた。翌日のシンポジウムの前のアイスブレイク（和やかな雰囲気意思疎通を図る場）となった。

カルコン・シンポジウム：「日米パートナーシップの形成—クリエイティブ産業、情報へのアクセス、サブナショナル外交」

(1) 基調講演・パネルディスカッション

冒頭、チェイス・F・ロビンソン国立アジア美術館館長による開会の挨拶後、チャールズ・D・レイクⅡ米国側カルコン委員長により、基調講演者が紹介された。



紹介を受け登壇した都倉俊一文化庁長官は、「アートと文化とその遺産について」をテーマに講演。日本では権力と権威が別々に存在していたため、権力者の変遷に関わらず文化を保存し続けることができた。その長い歴史をもつ日本文化を学ぶために一回の訪問では足りず、訪日観光客の多くはリピーターとして何度も日本を訪れている。世界で興行収入の多いメディア・フランチャイズのランキングトップ 10 は日本産のキャラクターが半分を占める事実等も紹介し、日本文化の世界における影響力を様々な事例を通して語った。

続いて登壇した東宝の松岡宏泰代表取締役社長は「ゴジラは大使になりえるか？」をテーマに講演。2024 年に 70 周年を迎えた東宝の怪獣映画「ゴジラ」は「最も長く継続しているフランチャイズ映画」としてギネス入りしている。第 5 福竜丸の事件をヒントにアイデアが生まれ、キングコングをこよなく愛する円谷英二氏が特撮手法を使って撮影した等の制作エピソードを紹介した。2023 年に公開された「ゴジラ-1.0」は米国アカデミー賞で視覚効果賞を受賞、この映画の興行収入は海外での実績が日本を上回った。これまでゴジラシリーズを 3 回制作停止・再開したが、その背景には米ハリウッド版との関係があったことを明かした。

2 者の基調講演後、ゴジラの研究者としても知られるウィリアム・ツツイ米側カルコン副委員長がモデレーターとなり、パネルディスカッションを実施。都倉長官は、観光客の訪日の目的が日本文化や精神性といった、深いスピリチュアルな部分を探求するフェーズに移ったと語った。松岡社長は、最も息の長いコンテンツとしてゴジラの世界的人気を保つ秘訣は、ゴジラをできる限りミステリアスに



保つことで、クリエイターの描き方に裁量を与えることだと語った。デジタル化によってアニメ市場が更にグローバル化し、OTT*などのストリーミングの登場によってビジネスセグメントが拡大したことで、アニメのニッチなセグメントも生き残ることができるようになったことも指摘した。

* OTT : Over-the-Top Media service インターネットを介して視聴者に直接提供される動画配信サービス



(2) パネルディスカッション：デジタル化とAIが情報のアクセスに与える影響
カルコンの分科会である「デジタル化時代の情報共有とアクセス」ワーキンググループの米側共同座長であるトレバー・A・ダウズ委員がモデレーターを務め、登壇者に高橋裕子カルコン委員の他、外部有識者としてジョンズ・ホプキンス大学上級研究員の道傳愛子氏、学術ジャーナル出版社エルゼビアのエミリー・シングレー氏を迎え議論を行った。

シングレー氏は、エルゼビアはデジタル・デバイドの解消のため、中低所得者国のNP0法人向けには査読済みのコンテンツを無料あるいは低料金で提供していることを紹介。アメリカは本サービスの対象外であるため、図書館や美術館等公的なコミュニティにおけるデジタル化の促進、コンソーシアム作りによる情報アクセスの強化が鍵となることを主張した。また、生成AIについて、官民パートナーシップを活用したりポジトリを共有しているニューヨーク州立大学の事例などを紹介した。ワーキンググループの日本側共同座長でもある高橋カルコン委員からは、国立国会図書館（NDL）の資料デジタル化の拡大と、海外からのアクセスの拡大の必要性を説明、そのための努力をカルコンのワーキンググループで継続していることが紹介された。ジョンズ・ホプキンス大学研究員で元NHK国際情勢担当解説委員の道傳氏は、偽情報への対策として、AIリテラシーを高め、出版元を明らかにしている記事かどうかをチェックすること、また、NHKのアーカイブスはAIを使うことで利用のスピードや正確性が改善され、NHKのドキュメンタリーのアーカイブスが熊本城修復という公共の利益に寄与した例を紹介した。



(3) ラウンドテーブル：日米サブナショナル外交の推進力

前カルコン米側委員長のシーラ・スミス氏がモデレーターとなり、登壇者にはカルコンの分科会「サブナショナル外交と地域間交流の促進」ワーキンググループのメンバー3名（小山田真委員、メアリー・アリス・ハダット委員、ジェシカ・リビングストン委員）と、NMAA から同美術館運営渉外担当ディレクターであるロリ・ダガン・ゴールド氏を迎え、ラウンドテーブルが行われた。

ハダット委員からは、データ研究の結果、世界ではグローバル化とローカル化が同時に起こっており、貿易と経済の観点からもサブナショナルな関係は重要で、特に地方においてサブナショナル外交活動が経済にもたらす影響が大きいことが判明したと報告した。ゴールド氏は、米国最大の美術館である NMAA は日本の「文化庁」の役割を担い、世界の 21 の美術館とスタッフ交流を行っており、レポジトリで東京国立博物館や東京大学とMOU、また国際交流基金とも学芸員交流プログラムを行うなど、サブナショナルな活動を行っていることを紹介した。全米姉妹都市協会（SCI）で初の日本人理事として経験を持つ小山田委員は、サブナショナル外交における姉妹都市の重要性を強調し、同委員が日本に創設した「日米姉妹都市協会（JUSSCA）」では、日米年次総会の開催、姉妹都市アラムナイの構築、サブナショナル外交グラントなどを行っていくとの活動方針を報告した。

「語学指導や自治体の国際活動支援等を行う外国青年招致事業 Japan Exchange and Teaching (JET) Program*」の経験者の全米各地の組織と連携している米国 JET プログラム・アラムナイ・アソシエーション（USJETAA）のエグゼクティブ・ディレクターであるリビングストン氏は、米国内のサブナショナル交流、草の根交流の担い手である JET アラムナイをお互いに紹介して、彼ら自身の就活につなげる「Senpai Spotlight」を行っていることを紹介した。本シンポジウムの会場参加者にも多くの JET 経験者がいることそのものが、注目を集めていた。



* JET プログラム：地方自治体が総務省、外務省、文部科学省及び一般財団法人自治体国際化協会（CLAIR）の協力のもと 1987 年から実施しているプログラム。2024 年現在、51 か国から 5861 人の参加者を約 1,000 の地方公共団体が受け入れている。

ランチ・プログラム



シンポジウムのゲストの一部を対象に、ランチをとりながら NMAA のキュレーターの話を聞くプログラムが行われた。当日は2つのプログラムが用意され、ひとつのプログラムでは、NMAA 美術館館長であるチェイス・F・ロビンソン氏が美術館の歴史や国際パートナーシップの実例を説明したのち、カルコン委員や登壇者らが意見交換を行った。もう一方のプログラムでは、NMAA 日本美術キュレーターであるフランク・フェルテン氏が講演を行った。同氏はチャールズ・ラング・フリーア氏が1985年に日本旅行で美術品を購入したのをきっかけに美術コレクターとなり、彼が寄贈したコレクションをもとに NMAA ができた経緯、また、コレクションは門外不出となっているが、デジタル化によって作品をより多くの人に体験してもらえるようになったことを説明。キャノンと京都文化協会が共催する「綴（つづり）プロジェクト」を通じ、NMAA の所蔵品の高精細レプリカ制作によって実現できた例を紹介した。（俵屋宗達の「松島図屏風 Wave of Matsushima」を堺市の祥雲寺に提供、すみだ北斎美術館への北斎の肉筆画のレプリカの貸与等）

NMAA 視察

同上フランク・フェルテン氏による NMAA のガイドツアー



国立公文書館視察

米公文書館に保存されている日米関連原文書を特別に視察。「日本とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約」(1960年1月19日締結)や、カルコン設立に関する「日米文化教育に関する合同委員会の設立に関する日本国政府とアメリカ合衆国との間の交換公文」(1968年11月8日)の他には、「ペリー総督の日記」(美しい筆跡で書かれ現地の風景や風俗、鳥、昆虫等の挿絵あり)や「アメリカ合衆国の忠誠心の宣誓 Oath of Allegiance」等、歴史的価値の高い原文書にカルコン委員は熱心に見入っていた。



山田重夫駐米日本大使主催レセプション

在米日本大使公邸において、山田重夫特命全権大使による歓迎挨拶の後、チャールズ・D・レイク米側カルコン委員長及び、佐々江賢一郎日本側カルコン委員長が謝辞を述べた。続いて Robert Koepcke 米務省東アジア・太平洋・日本・韓国・モンゴル担当次官補が日米関係の一層の重要性を述べ、シーラ・スミス前カルコン委員長が乾杯の音頭をとって会は始まった。レセプションには様々な分野のサブナショナル外交の担い手が招待され、カルコン関係者を中心に、積極的な意見交換・交流が行われた。参約 70 名が参加した。



以 上